

「情報」を教材として扱うことの可能性

―働く場とジェンダーをめぐる―

井原 あや

一 大妻女子大学文学部日本文学科

抄録

二〇一八年に公示された「高等学校学習指導要領」において、国語は大きく改訂された。本稿は、その中の「現代の国語」で「情報」を教材として扱うことの可能性を考察したものである。「情報」といっても様々なものが考えられるが、本稿では新聞記事や雑誌記事を「情報」としてとらえ、近年、教育の場でも注目されるSDGsの一つである「ジェンダーの平等」について、国語という教科のなかで何を考えることができるのか、記事を通して働く場とジェンダーをめぐる表現を中心に検討した。

一 はじめに

二〇一八年に公示された「高等学校学習指導要領」^{〔一〕}において、国語は大きく改訂されることとなり、「情報」に関する言及もなされた。本稿では、この「高等学校学習指導要領」の「現代の国語」に示された「情報の扱い方」に注目してみたい。

前述の「現代の国語」に記載された「情報」に関わる部分については、日比嘉高が「今回の指導要領に含まれる内容は、一〇年間の時間

の経過のなかでたしかに現代に合わせて正当にアップデートされている面もある。特に評価しておきたいのは、高校国語科の一部科目における内容構成のうち、「知識及び技能」^{〔二〕}の中に、「情報の扱い方」に関する事項が新設されたことである」と述べている^{〔三〕}ように、情報にいかに向き合うかを示したものとなっている。さらに「思考力、判断力、表現力等」^{〔四〕}の「A 話すこと・聞くこと」の指導事項においても、「A 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること」

と記載されており、「B 書くこと」の指導事項にも「A 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすること」「イ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度を考えて、文章の構成や展開を工夫すること」とある。つまり、集めた「情報」をもとに、生徒が何を考え、何を伝えるのか／何を伝えたいのかを指導していく必要があるということになる。

こうした生徒の伝える力は、前述の「話すこと・聞くこと」「書くこと」のみならず、「読むこと」とも関連させることで、伸ばしていくことができるだろう。中学校の国語科に関してはあるが、中谷いずみは学習指導要領の「読むこと」と「書くこと」の指導事項を結び付けつつ批評力を育成することの大切さを述べている^三。この中谷の指摘は、今回の「高等学校学習指導要領」でも生かされるべきものだろう。「高等学校学習指導要領」の「C 読むこと」の言語活動には、「ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、その内容や形式について、引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動」「イ 異なる形式で書かれた複数の文章や、図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動」を通じて指導するよう書かれている。このように「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の指導事項を通して見てみると、先の伝える力は、情報を整理し「理解」すること、「批評」することも関連付けながら育成していく必要があるのだ。ここで、「情報」あるいは「情報の扱い方」という言葉について少し考えてみたい。

すでに指摘のある通り、「高等学校学習指導要領」が示す「情報」

という言葉は、かなり幅を持たせた意味合いで使われており、新設されたものの何をもって「情報」とするのか、明確には言い難い部分もある^四。たとえば、「書くこと」の言語活動「ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する活動」に示された「本文」や「資料」また「文章」といった言葉は、「情報」とほぼ同義にとらえることができるだろう。これは今後、社会的な議論のなかでさらに深まる（深める）ものと思われるので、性急に「情報」とは何かという答えを見出すのは難しいが、本稿では先に挙げた「書くこと」の言語活動を踏まえつつ、新聞や雑誌の記事を「情報」ととらえ、教材として一つの提案をしてみたい。

「高等学校学習指導要領」に「情報」という言葉が盛り込まれた背景には、近年、日本のみならず多くの国が抱える問題がある^五。このような問題を生み出さないためには、何かの事柄に対して、情報を一つ取り上げ、それを拠りどころとして自分の意見を確立するのではなく、その事柄の背景も理解した上で、自らの意見を伝えることが重要となる。また一方で、授業を受ける生徒たちが興味・関心を持ち、自身の身の回りや日常生活を考えるきっかけになるような教材が新設された「情報」でも求められよう。そこで、「情報」といっても様々なものが考えられるが、本稿では新聞記事を最初の入口として、雑誌記事に繋げて考えてみたい。新聞も雑誌も、当然ながら情報の集合体である。すでに新聞は国語に限らず授業に用いられているが、それに雑誌を加え、教材として利用することでどのような授業が展開できるか、特にジェンダーに関する情報を教材として扱うことの可能性を検討してみたい。同じ事柄（本稿ではジェンダーに関して）に、読者層も時代も異なる紙面・誌面を通して向き合い、生き方や働き方を方向

づけようとする言葉の力学と、その背後にある社会規範に目を向けるきっかけとなるような「情報」を学ぶことも必要なのではないか。以下、国語科の授業でジェンダーを扱うことの意義を確認した後、新聞や雑誌のなかのジェンダーに関する情報を教材としてどの様に用いるか考察していく。

二 SDGsと国語科

近年、様々なメディアを通して「SDGs」という用語を聞くようになった。周知の通り、SDGs (Sustainable Development Goals) とは、二〇一五年の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」を指し、二〇三〇年までの達成を目指している。一七の分野で構成されたこの目標は、貧困や健康、教育、産業、環境問題など、国を超えて誰もが向き合うべき問題が示されている^{〔六〕}のだが、その五つ目に「ジェンダー平等を実現しよう」という目標が組み込まれている。

こうしたSDGsについては、私立の中学入試でも出題されているほか、公立中学校の授業でも取り入れられている^{〔七〕}ので、生徒たちにとつてもある程度馴染みのあるものと思われるし、高等学校の国語においてもSDGsを取り入れた授業が報告されている^{〔八〕}。

実際にSDGsを教育に取り入れた取り組みは新聞でも確認できる。たとえば、『朝日新聞』の「学びを深める 変わる大学入試2020」というコラムでは、教科書に収録された小説をもとに、次のような問いが提示されていた。

日本の小説で女性の描かれ方はどう変化してきたか、具体的な作

品名と時代背景を関連づけて400字程度でまとめよう^{〔九〕}

この問いは、前述のSDGsに掲げられたジェンダーの平等と結びつけながら、高等学校の現代文の教科書に収録されている「羅生門」^{〔一〇〕}、「こころ」^{〔一一〕}、「山月記」^{〔一二〕}、「舞姫」の場合、女性の登場人物はいるものの、いずれも男性の視点からストーリーが展開され^{〔一三〕}、著者も男性であること、一方の「現代小説では女性を主人公とする作品が増え、多くの女性作家も活躍」^{〔一四〕}していることを挙げたうえで作られたものである。コラムには「小説を通して、作品が書かれた時代の男性・女性に対する社会の意識を垣間見ること」^{〔一五〕}ができ、小説のみならず「評論など幅広い文章を通して考えてみる」^{〔一六〕}こともできると書かれていた。このような問いを深めれば、生徒たちが近現代の文学や文学史について捉え直し、考える視点を身につけることも可能になるだろう^{〔一七〕}。

このように、SDGsの一つであるジェンダーの平等について高等学校の国語の授業で学び、考えることは可能なのだが、これを「高等学校学習指導要領」の「現代の国語」の「情報」に当てはめて考えると、どのような教材が考えられるだろうか。

すでに高等学校では、新聞を小論文等の教材として用いているところもあるだろう。そこでまずは新聞からジェンダーに関する記事を取り上げ、それを入口に教材の幅を広げていくことを試みる。ジェンダーといっても様々な記事が考えられるが、ここでは特に働く場とジェンダーの関係性をめぐる記事を例として取り上げたい。働くことを取り上げる理由は、高等学校卒業後、就職する者、専門学校や大学に進学する者というように進路は異なるが、いずれにせよ多くの生徒が数

年後には社会人となり働くことになる。そうした働くということの背景が抱え持つ事柄を理解し、当事者としての意識を持つて考えてもらうためである。

三 新聞記事の活用

まずは一つの教材にあたる新聞記事を挙げてみたい。二〇一八年一二月に世界経済フォーラム(WEF)が公表したジェンダーギャップ(男女格差)のランキングで、日本が一四九か国のうち一一〇位だったことは記憶に新しい。ここ二年ほどの状況を見ても、二〇一六年は一四四か国中一一一位、二〇一七年は一四四か国中一一四位という位置におり、なかなか変わらない現状が見て取れよう^{二五)}。

そうしたなか、二〇一八年のランキングが公開されてからほどなくして、「女性経営者の壁壊そう」という見出しのもと、「政治、経済、教育、健康の4分野のなかで、とりわけ大きな男女格差があるのが経済と政治だ。(略)日本はWEFで指摘された女性管理職の少なさに加えて、女性経営者が少なく、軽視されがちな現状がある」^{二六)}という記事が新聞に掲載された。この記事は、ジェンダーギャップを政治・経済、教育、メディアという三つの視点から取り上げたなかの第一回目(政治・経済)にあたる。記事では最初に企業内の女性管理職や女性経営者の少なさがまとめられ、続いて、女性の政治参加について、最後に世界との差を示しつつ、ジェンダーギャップの認識を持つこと、対策を考えること等が今後の課題として挙げられていた。

この働く場とジェンダーをテーマに、まずは新聞記事を読むところから始めてみたい。生徒には、今回の教材のテーマを踏まえ、最初の

論点である企業内のジェンダーギャップと末尾の今後の課題を中心に読むよう伝え、ある程度読む時間を取る。その後、「記事からわかったこと」を短い文章で書かせ、その「わかったこと」に対する自分の意見と、なぜその意見に至ったのか、簡単に理由も書き添えるよう伝える^{二七)}。こうして、最初の記事に向き合った時の自らの意見と理由をまとめた後、雑誌記事へと移っていく。ここでは、雑誌記事から働く女性の位置や求められていたことなど、女性が働くことに対する周囲の認識を確認することを目的とした教材を提示する。

もちろん、こうしたアプローチのみならず、次のようなアプローチも想定できるだろう。たとえば、先に取り上げた記事と同時期に他の主要新聞で女性と働くことをテーマにした記事があるのか、グループワーク等を用いて生徒自身が調べ、それらの記事を読み比べてみる。そうすることで同じテーマであっても新聞によって伝え方の違い、視点の違いなどがあることを理解することもできるだろうし、そこから自らの初発の意見を振り返り、考えを深めることも考えられる。が、ここでは、雑誌記事を通じて、働く女性に求められていたことを振り返えるという点に注目したい。働く女性の歴史を振り返るポイントが多々あるが、なぜ女性の管理職や経営者は少ないのか、企業において女性はどの様な役割を期待されていたのか、特に(ビジネスガール)という言葉 키워ドに雑誌記事を振り返りながら女性と働くことについて内容を深めることを試みる。先にも述べた通り、新聞も雑誌も情報の集合体である。ことに雑誌は、広範な読者を持つ新聞とは異なり、読者層がある程度限定される。その分、時代の特色や要求を切り取り、反映した情報をまとめ上げるメディアと言えよう。そうしたメディアで、過去に女性と働くことをめぐってどのような言葉のや

りとりがあつたのか、「ビジネスガール」と呼ばれた女性たちはどのように働き、周囲からどのようなイメージを持たれていたのかを考えてみたい^{二八}。

四 雑誌記事の活用

先に一つ目の情報として、近年注目されているSDGsにも関わるジェンダーギャップの問題とあわせて、女性管理職・経営者の少なさを扱った記事を教材に取り上げた。ここでは、時代を遡って一九五〇年代から一九六〇年代にかけて企業で働く女性に向けて用いられた「ビジネスガール」という言葉に光を当て、記事を取り上げてみたい。「ビジネスガール」とは、BGとも呼ばれ、多くは高等学校卒業後に企業で事務職に従事した女性をさす^{二九}。彼女たちはのちに「オフィスレディ」/OLとも呼ばれるようになるのだが、一九五〇年代の雑誌、特に若い女性に向けた雑誌には「ビジネスガール」に関する情報が溢れている。当時、彼女たちの働き方がどのようにとらえられていたのか、雑誌の記事を読むことで理解を深め、情報を読み解く視点を掴むことが次の目的となる。

まずは、『婦人生活』（同志社のち婦人生活社）の記事を二点提示してみたい。『婦人生活』は、目次や読者欄から考えて、一〇代後半の「ビジネスガール」から二〇代の既婚女性を読者とした雑誌で、誌面には「ビジネスガール」の話題も掲載されている。「職場一年生のふところ手帖（2） 職場の上長先輩や同僚異性との交際い方^{三〇}」という特集は、タイトル通り「職場一年生」、つまり企業で働くようになってまもない若い女性に向けられたものである。この記事にはまだ「ビジ

ネスガール」という言葉は見当たらないが、見出しごとに新社会人となった女性へのアドバイスが綴られており、当時の職業観・働き方などもわかる記事である。ここでは先の特集のうち、「つゝましい誠実さ」と「お茶を出すこと」という見出しにまとめられた記事を引用してみたい。

あなた方は女であつても、仕事に対してはあくまでも必死に取組むだけの、旺盛なフアイトが、是非必要なのですが、しかし、職場に入ったばかりの、いわば一年生のあなた方には、それより先に、まじめに上長の指示をつゝましく聞くといったことが、一番大切なことと思います。（「つゝましい誠実さ」^{三〇}）

さて、いつも問題になるのは事務所でのお茶くみの問題です。（略）／やはり、職場では妹さんのあなた方です。お家でお父様やお兄様にお茶を出して上げるように、ごく自然な気持で職場でもそうしたやさしい女らしさは持つて頂きたいと思ひます。

（「お茶を出すこと」^{三一}）

右の記事を読んだ上で、先の新聞記事の場合と同じく、「記事からわかったこと」をまとめさせて、自分の意見とその理由を書いてもらう。たとえば右の二つの記事のうち、「つゝましい誠実さ」には、「女であつても、仕事に対してはあくまでも必死に取組む」とある。ここからわかることは、「男」という言葉こそ書かれていないものの、「女であつても」という部分からわかるように暗に比較されているのは男性であること、その上で、女性であつても仕事には必死で取り組む必

要があると説かれている点だろう。また一方の「お茶を出すこと」は、職場が何に置き換えられているかを示すものと言える。新人の女性社員は「妹さん」で、男性上司や年上の男性社員たちは「お父様」か「お兄様」、つまり職場が家庭と同じ意味合いで語られているのである。仕事は必死に、けれども職場は、金野美奈子^{〔三三〕}の指摘する通り家庭と一続きと捉えられ、「やさしい女らしさ」を持ち合わせること——記事からは、女であるということがどちらにも（女であつても）／「やさしい女らしさ」利用可能な表現として用いられていることがわかり、企業内での新人の女性社員の位置なども掴むことができるのだ。こうした記事は、当時の社会規範や企業の体質が、仕事を性別が持つイメージによって分けようとしていることを示すものとなり、最初の新聞記事に書かれていた女性管理職や経営者の少なさの歴史を知る一つの手立てとなるだろう。

さらに、もう少しお茶くみと（ビジネスガール）に関する雑誌記事に目を向け、働く場とジェンダーの関係性を理解できるようにしたい。「高等学校学習指導要領」の「現代の国語」に示された「情報」には、「吟味」することの重要性が説かれている。今回の教材の場合、ジェンダーギャップ指数のランキングが常に下位である背景の一つと考えられる、過去に働く女性が置かれた立場を記事から探ることがこの「吟味」に当たるだろう。お茶くみと（ビジネスガール）についての記事は、その後も誌面に登場するのだが、たとえば「ビジネス・ガールの5章」（特集 ビジネスガールの生活手帖）の「お茶をくれ」という見出しには、次のように書かれていた。少し長くなるが以下にその一部を引用してみたい。

日本の執務形態が、お茶くみばかりでなくいろいろな点でそこまですで公私の別がはっきりしていないから、感情的にも公私の区別がつかない。／だがお茶をくれといわれる側で、そう神経を立てるのも、私はどうかと思う。もしあなたが職場に長くいて、仕事の上にも実績を上げ、美しい年齢の輝きも加えて来れば、もうお茶を汲まされなくてもよくなるからだ。一軒の家にしても、妹たちが大きくなって来れば、お姉さんはもうお使いに行かなくともよいのと、それは同じである。／（略）ここが辛抱のし所と思って、耐えてすれば、妙なストレスが加わって悲しくなる。そこで、家庭の中で、お父さんなりお兄さんなりが、お茶をのみたいだろうときに汲んで上げるやさしい娘心をもってしては如何だろうか。

（「お茶をくれ」^{〔三三〕}）

この記事を先の「つゝましい誠実さ」と「お茶を出すこと」の「記事からわかったこと」をまとめた後に提示してみると、企業と家庭が地続きで捉えられていたということが、生徒にはより説得力のある情報として見えてくるのではなからうか。ことさらに難しい説明をしなくても、記事からは当時の職場が性別によって社員を切り分けていたことが伝わってくる。記事では、お茶くみのようないわば直接仕事と関連しないプライベートな問題が生じるのも日本企業の形態ゆえだろうと、企業側の問題に目を向けるものの、結局は社員に「妹」「お姉さん」「お父さん」「お兄さん」といった家庭での呼称を用い、職場でも「娘心」を持つとうと提案している。このような一連の記事から、当時の（ビジネスガール）が企業においてどのような立場に立たされていたのか理解できよう。小平麻衣子が一九五〇年代後半から一九六

○年代にかけて女性週刊誌『女性自身』に掲載された記事にふれて「職場で〈女性らしい〉気遣いを要求する社会は、女性に職場よりは家庭にいてほしい社会であり、BGたちは、仕事をずっと続けさせてもらえるかもわからないが、仕事をしていることで家庭的とは思われずに結婚できないかもしれない、という板挟みに悩んでいるのでもありました」^{二四}と指摘するように、〈ビジネスガール〉は企業内で難しい位置に立たされていた。本稿で教材とした『婦人生活』でも、「BG生活そのはかなき5年間」^{二五}というタイトルのもと、結婚によって退職する女性たちに向けて「BG無用論」という議論が交わされていたことが示されている。当時の〈ビジネスガール〉は、志願者は増加するものの勤続年数は短く、職場に定着できない存在なのだ^{二六}。つまり、先の「お茶をくれ」の記事に書かれていた「お姉さん」になるまで我慢しよう（ある程度会社で働き自分より下の女性社員が増えるまで我慢しよう）、ということが当時できたのかといえ、できないのである。また女性社員が直面した結婚による〈寿退社〉や暗黙のルールのような〈三〇歳定年制〉によって、たいていの場合、長く勤めることが難しかったのだということ、別の雑誌記事や教員の説明で補っていくことも必要だろう。

ここまで、新聞記事を入力として一九五〇年代から一九六〇年代の雑誌記事を中心に、働く場とジェンダーの関係性を検討した。ここまですべてを振り返って、「新聞記事で指摘されているような、女性管理職あるいは女性経営者が少ないことの背景の一つには、女性が働くことに対するこれまでの認識も影響している。女性社員は職場においてどのような存在として見られていたのか、雑誌記事を用いて説明し、それに対する自分の意見を書いてみよう」といった問いかけを試みるの

も、各々記事の内容の復習にもなり、意見をまとめ、伝える力の育成につながるのではなからうか。

五 情報の集集体として

今回、雑誌記事の教材として提示した『婦人生活』は、当時〈ビジネスガール〉にも愛読されていた。「高等学校学習指導要領」の「解説」^{二七}にあるように、「現代の国語」は実用的・論理的な文章を扱う科目であって小説は扱わないので、この後の展開としては、ジェンダーに関する評論等を読むという方法が考えられるが、雑誌が情報の集集体であることは先にも述べた通りである。とするならば、雑誌のなかで〈ビジネスガール〉を登場させた小説もまた、当時の読者にとってみれば情報の一つであっただろう。同じ誌面に掲載されていた小説が、記事とどのような関わりを持っていたのかを知ることが、読むことへの興味・関心を引き出すツールになると思われる。

その際、小説の二・三行を抜き出すのではなく、文章の総体として小説に向き合うことが出来ればよい。たとえば、当時は〈BG小説〉と呼ばれる小説が女性雑誌（月刊誌）や女性週刊誌に登場する時期でもあった。いわゆる〈サラリーマン小説〉で知られる源氏鶏太も〈BG小説〉^{二八}を書いていて、本稿で記事を取り上げた『婦人生活』にも「向日葵娘」（一九五二年一月〜二月）という小説を連載している。教科書の定番教材とは異なるが、情報とともに消費された作家・小説であり、職場を舞台とする小説を書いたという点では、本稿で挙げた一連の教材と繋がるものだろう。当時人気のあった作家が〈ビジネスガール〉を主人公とした小説で何を描いたのか、小説のなかで〈ビ

ビジネスガール」はいかに描かれたのか知ること、より一層理解も深まるはずである。

「向日葵」の連載第一回目の概要は次の通りである²⁹。主人公の藤野節子は二一歳。高校卒業後は家事手伝いをしていたが、大阪・北浜にある会社の庶務課で働くことになり、「弁慶さん」というあだ名の親切的な男性社員のアシスタントとして書類整理等を行い、お茶くみも率先して行なっていた。ある日、会社内の女性社員たちは男性社員から要求されるお茶くみに耐えかねて、お茶くみストライキを起すのだが、節子だけは「弁慶さん」のことを思っただけで複雑な思いでいる。節子は帰宅後、両親にストライキについて相談し、自らの意見を「家庭にだって、男に向く仕事と、女に向く仕事があるように、会社にだって、そうなんだ、と」思っています。お茶をいれるのも、その一例に過ぎないのやないかしら」と話し、翌朝、通勤電車内で「弁慶さん」に助けられたこともあって、周囲に何を言われても彼にお茶くみをすることを決めるのであった。これが連載第一回目の大まかな内容だが、その後もお茶くみストライキが会議で議論されたり、節子をよく思わない女性社員の抑圧や「弁慶さん」との恋が描かれ、最終回で節子と「弁慶さん」は恋を交わらせて大団円となる。

連載第一回目には、女性社員に対する男性社員の「おい、お茶をくれ」といった乱暴な物言いや「お茶をいれるのが、女の仕事やないか」「男女同権は恐れいったね。ロクに仕事も出来ないくせに」といった台詞が描かれており、誌面で話題になっていた「お茶くみ」が創作にも影響し、共振・共鳴していることがわかる。また、主人公の節子が、家庭の中での良い娘そのままに、職場でも素直で正義感の強い、それでいて性別役割を心得た、当時の「お茶くみ」問題に対する模範解答

のような娘（「ビジネスガール」）として登場し、家庭と企業の繋がりを体現している点も注目すべきだろう。このようにして、情報が創作とも影響関係を持つものであることが授業を通して示すことができれば、生徒の興味や関心を引き出すきっかけになるのではないか。

六 おわりに

本稿では、SDGsが掲げる「ジェンダーの平等」から（ビジネスガール）の置かれた立場や位置に遡って考察したが、ほかに、いわゆる（大黒柱）として働く場を当然のこととしていた当時のサラリーマンに光を当てたり、性別イメージが喚起させる（らしさ）が職場とどのように関係しているのか、グループワーク等を通じて生徒が意見を交換し合うこともできるだろう。また、働く場とジェンダーに関する新聞記事や雑誌記事を時代ごとに追い、一方で小説や漫画のなかで主人公がどのように描かれているのか、どのような悩みや直面しているのか、その変遷を辿っていくといった方法も、情報を整理し伝える力を養うことができ、かつ読書とも関連付けた学習となる。いずれにせよ重要なことは、情報の積み重ねではなく、考えを深化させながら、学ぶことの面白さや、学ぶことで生徒自身が抱えていた（何か）に（本稿の教材の場合では、ジェンダーに関する複雑な思いに）向き合えるようになったり、その（何か）を言語化できる手助けとなることである。そうした生徒に寄り添った教材が求められるだろう。

注・引用文献

「二」以下、「高等学校学習指導要領」の引用は全て、文部科学省「高

等学校学習指導要領（平成30年告示）」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFile/s/afeldfile/2019/09/26/1384661_6_1_2.pdf（最終確認2019年10月8日）による。

〔二〕日比嘉高「高校国語科の曲がり角 新学習指導要領の能力伸長主義、実社会、移民時代の文化ナショナリズム」（『特集＊教育は変わるのか』『現代思想』二〇一九年、第四七巻、第七号、一一四—一二三頁。）

〔三〕中谷いずみ「書くこと」による批評力の育成——「読むこと」との繋がりを意識して——【中学校】（『特集「思考・判断・表現」の学力を育成する』『日本語学』二〇二一年、第三〇巻、第一〇号、二〇—二七頁。）

〔四〕「高等学校学習指導要領」の「情報」については、前掲〔二〕や紅野謙介「国語」改革における多様性の排除 教材アンソロジーの意義」（『特集＊教育は変わるのか』『現代思想』二〇一九年、第四七巻、第七号、一〇六—一二三頁）などで指摘されている。

〔五〕前掲〔二〕において日比は、「インターネットを中心に大量の情報が出回るようになり、そのどろが信頼できるのか迷うような事象や、対立するような見解のいずれに与するべきなのかをより適切に判断できるようになるためには、「情報の扱い方」が示した能力は非常に重要である」と述べている。

〔六〕無署名「SDGsとは」（『特集』わが子と学ぶSDGs）『朝日新聞 エデュア』二〇一九年七月二十八日、一面）参照。

〔七〕無署名「2019年に出題されたSDGsと関わる中学入試問題」（『特集』わが子と学ぶSDGs）『朝日新聞 エデュア』二〇

一九年七月二十八日、一面）のグラフ、および松倉紗野香・聞き手山下茂「好奇心の喚起が学力向上につながる 全校でSDGsを学習課題を「自分ごと化」（『特集』わが子と学ぶSDGs）『朝日新聞 エデュア』二〇一九年七月二十八日、二面）を参照。

〔八〕三木由美子「よりよい社会にするために」SDGs×「まわしよみ新聞」く（『研究報告および授業実践報告』『会誌 平成30年度研究集録（創立70周年記念号）』滋賀県高等学校国語教育研究会、二〇一九年、六六号、一六—二二頁。）

〔九〕伊吹侑希子「学びを深める 変わる大学入試2020」（『朝日新聞』二〇一八年二月八日、朝刊、三二面。）

〔一〇〕前掲〔九〕に同じ。

〔一一〕前掲〔九〕に同じ。

〔一二〕前掲〔九〕に同じ。

〔一三〕前掲〔九〕に同じ。

〔一四〕ほかにジェンダーと国語教育に関しては、秋吉和紀「ジェンダー・センシティブを育む国語教育の実践」（『国語教育研究』二〇一七年、第五八号、九一—九九頁）、木村季美子「高校国語科におけるセクシュアル・マイノリティ教材の授業の提案——谷村志穂「雪ウサギ」を用いて——」（『奈良教育大学国文 研究と教育』二〇一七年、第四〇巻、一五—二九頁）等がある。

〔一五〕ジェンダーギャップ指数のランキングについては、内閣府男女共同参画局総務課「世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2018」を公表」（『共同参画』二〇一九年、第一一九号、七頁）および内閣府男女共同参画局総務課「世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2017」を公表」（『共同参画』二〇一八

年、第二〇八号、八頁）を参照。

〔二六〕高橋末菜ほか「女性経営者の壁 壊そう」（『朝日新聞』二〇一八年二月二〇日、朝刊、七面。）

〔二七〕こうした書く指導方法については、前掲〔二二〕を参照。

〔二八〕〈ビジネスガール〉と雑誌の関係については、井原あや『女性自身』と源氏鶏太——「ガール」はいかにして働くか（『国語と国文学』二〇一七年、第九四巻、第五号、一三七—一五〇頁）を参照。

この拙論では、雑誌研究の視点から『女性自身』の〈ビジネスガール〉に関する記事を分析した。

〔二九〕〈ビジネスガール〉やその後の〈オフィスレディ〉については金野美奈子『OLの創造 意味世界としてのジェンダー』（勁草書房、二〇〇〇年）を参照。

〔三〇〕石垣純二「職場の上長先輩や同僚異性との交際^{つぎあ}い方」（『職場一年生のふところ手帖（2）』『婦人生活』一九五一年、第五巻、第四号、二二四—二二七頁。）

〔三一〕前掲〔二〇〕に同じ。

〔三二〕前掲〔一九〕に同じ。

〔三三〕松田ふみ子「お茶をくれ」（『ビジネス・ガールの5章』『婦人生活』一九五八年、第二二巻、第七号、一九九—二〇〇頁。）

〔三四〕小平麻衣子「作品は、読まれなくても〈名作〉になる 堀辰雄『風立ちぬ』を例に」（『小説は、わかってくればおもしろい——文学研究の基本15講』慶應義塾大学出版会、二〇一九年、一四五—一五六頁。）

〔三五〕〈座談会〉土岐雄三・大和勇三・十返千鶴子・上坂冬子「B G生活そのはかなき5年間」（『婦人生活』一九六四年、第一八巻、第

三号、二三二—二三六頁）。なお、〈B G無用論〉とほぼ同時期に〈女子大学無用論〉や〈女子学生亡国論〉が話題となっていたことを合わせて考えると、労働や教育の場における女性の位置が見えてくる。

〈女子大学無用論〉と〈女子学生亡国論〉については小山静子「女子学生批判が意味したもの」（『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、二〇〇九年、一四九—一九一頁）を参照。

〔二六〕当時の〈ビジネスガール〉の平均勤続年数については、『女性自身』（前掲〔二八〕参照）でも取り上げられていたほか、川田喜久治・上坂冬子「B Gであること」（『文藝春秋』一九六二年、第四〇巻、第二号、グラビアのためページの記載なし）でも、〈ビジネスガール〉の働き方などが写真と文章で紹介され、「昨今のB G志願者は年々30万人の増加である 平均勤続四年で その回転は早い」と書かれている。

〔二七〕「解説」については、文部科学省【国語編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFile/s/fieldfile/2019/03/28/1407073_02_1_1.pdf（参照二〇一九年八月三〇日）を参照。

〔二八〕〈B G小説〉については、前掲〔二八〕を参照。

〔二九〕源氏鶏太「向日葵」（連載第一回）の本文の引用は、「向日葵」（『婦人生活』一九五二年、第六巻、第一号、六四—七五頁）による。

※引用文中のルビは適宜省略したが、特異なものは原文のままとした。また、引用文中の改行は「／」で示した。

（受付日：二〇一九年九月六日、受理日：二〇一九年九月一七日）

井原 あや (いはら あや)

現職…大妻女子大学文学部非常勤講師

専門は日本近代文学。著書『ヘスキャンダラスな女』を欲望する――
文学・女性週刊誌・ジエンダー』（青弓社、二〇一五年）。

**Possibility of handling "information" as teaching materials
—Workplace and gender—**

Aya Ihara¹

¹ Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Japanese Language and Literature,
Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

Key words : Japanese Language, Information, Gender, Newspaper, Magazine